

会員ニュース

深谷賢治氏の藤原賞受賞に寄せて

太田啓史

名古屋大学多元数理科学研究科

この度、京都大学理学研究科の深谷賢治氏が「位相的場の理論の幾何学的実現とその数学的基礎理論の構築」の業績により 2012 年第 53 回藤原賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。以下この原稿では深谷さんと呼ばせて頂くことをお許し下さい。編集部より、雑誌「数学」の正確な数学的記事とはまたひと味違ったエピソードなどをとのことですが、深谷さんは既に数多くの賞を受賞されておりその度にいろいろな方々がお祝いの言葉を寄せておられます。まわりの人間としては甚だ困ったことでありまして、エピソードといえどもいろいろなあり調子の良いものばかりでもありません¹。今後受賞を重ねられるのであれば、程よいエピソードも生産していつて頂ければ助かります。なお、数学的業績については [2] あるいは小野薫さんとの共同研究については [1] をご覧下さい。

藤原賞は旧王子製紙社長の故藤原銀次郎氏が発起人となり日本の科学技術の発展に卓越した貢献をした科学者を顕彰するものだそうです。授賞式当日の挨拶の折、紙を多量に使ったくらい貢献はしたかもしれませんがと自虐的な冗句を言われていました。最近、我々の共同研究の論文のページ数がどんどん増えてきていて、個人的には、製紙会社には申し訳ないですが、なるべく短くしたいと思っていたところでした。

初めて深谷さんにお目にかかったのは、筆者が学部 3 年生の時、助手として多様体の演習を担当されている時でした。毎回出席をとるという当時にしては何とも教育的なもので、小心者の筆者は毎回出席していましたが、大抵となり近所と雑談をしていることが多くあまり記憶がありません。ただ、演習中、深谷さんはクルクルと鉛筆を回しながら、斜め上方 45 度あたりの中空を見て頭を左右に回しながら、考え事をしておられるのか、発表を聞いておられるのかよくわかりませんが、ともかく考えながら仕事をされている姿が記憶に残っています。後で伺うところによると、出席をとるのは講義担当の先生の方針であり自分の趣味ではなかったそうです。鉛筆回しは、筆者位の年齢だと中高生のときに流行っていて大抵周りの人間はできるようになっていましたが、深谷さんの説によると、深谷さんは鉛筆回しの先駆者世代だそうで自分より上の世代の人はできない、といっておられました。ほんまかいなと思って、丁度入試

¹例えば、合宿セミナーの宿の予約のため研究室から電話をかけようとされた時、風が吹いて、知らぬ間にガイドブックの隣のページの宿に電話して予約してしまったというのはそういう例には入らない。

の採点中でそこらへんにいた数学者に試しにやってみてもらったところ確かに深谷さんより（たとえ1つ違いであっても）年上でできる人はおられず、未だに反例を知りません。かつて、ゲージ理論で有名な C. Taubes が深谷さんの鉛筆回しをみて、「日本人はみなできるのか？」と聞いてきたのでそういうわけではない、という、「自分にも教えて欲しい」といつてきたことがありました。しばらく練習していたようですが、その後彼ができるようになったかどうかは知りません。

鉛筆回しともう一つ特徴的な行動に頭を叩くというのがあります。最近は少なくなった気がしますが、講演などを聞いておられる時に、突如御自分の頭を叩かれることがあります。かなり強く叩かれるときもあります。ある研究会の時、前の方に座っておられた深谷さんが突如頭を何度か叩きました。後ろの方に座っていた私の隣にいた某氏が、Is he OK? と聞いてきましたので、As usual と答えました。しかし、危険で心配ですので今後は控えられることを願います。因にこの時は、Taubes が頭の叩き方を「自分にも教えて欲しい」とは言ってきました。

また、講演後つたつたつたとやって来られて「さっきの話ですけどね、こうじゃないかと思うんですけど。云々」といつて講演前に議論していたことについて講演後話が進むことがままありました。その割に講演も肝心なところは聴いておられる。感心させられます。ひょっとすると頭を叩くことと関係があるのかもしれない。そうだとすると Taubes は惜しいことをしたというべきでしょう。

筆者がまだ駆け出しの頃、某氏が日本の数学について日本酒をたとえに以下のように評したことを耳にしたことがあります：「米を磨いて上級の大吟醸酒を作りそれが国際的に認められるということはあるとしても、強烈などぶろくを作りそれが認められるということは珍しいことである。どちらが良い悪いの問題ではないが」この表現を借りれば、深谷さんは若い頃大吟醸を作られていたようにもお見受けしますが、最近パンチのあるどぶろくも創っておられるように思います。そしてそのどぶろくは国際的に高く評価されているように思います²。海外の研究会やセミナーなどで講演されていると、板書の間違いや字が読めないことなどは全部さておいて、皆が熱心にそのアイデアやストーリーを聞き取ろうとしている姿がよく見られます（稀に細かい間違いを執拗に言うてくる人がいますが、多分どぶろくが嫌いなのでしょう。）講演が終わっても優秀な若い人々がやってきて輪になって議論になることもしばしばです。溢れ出てくるアイデアに時間が足りない、という印象です。とにかくパワフルです。人間のエネルギーは使えば減るものではなく使えば使うほど生まれてくるものだ、というのはミュージシャン近藤等則の言葉であったと思いますが、そういう感

²稀にラベルを張替えて出荷しようとする人がいると、そういう時には敢然と立ち向かう姿勢は学ぶところが大きいです。

じです。しかしその実、ご自身はピノノワールの香りのよいブルゴーニュワインや洗練された吟醸酒などが好きなようで、酒の趣向と数学とはあまり関係がないのかもしれませんが。

かれこれ 20 年ほど共同研究をさせて頂いており、メールのやりとりを頻繁に行なうわけですが、返事がくるのは夜中の 2 時 3 時、あるいは明け方であることが普通です。当方はその時寝ていますので、必然的にタイムラグが生じます。午後にメールがくることはありますが、狭義の意味での午前中（朝から正午）にメールがくることは稀です。たまに午前中すぐに返事がきて驚くことがありますが、それは大概海外におられる時です。奥様のお話では日頃は夕食後「昼寝」をされてから、深夜から朝まで数学をされ、朝帰りをして朝食をご家族と共にとられるそうです。昼間はなかなかお忙しいのであろうと推察します。お体には十分気をつけて頂きたいと思います。

深谷さんのアメリカ嫌いは一部では有名であったと思います。1990 年に初めてアメリカでお会いしたとき、食事はまずい上に多い、歴史が浅い、等々色々と不満をおっしゃっていました。ジーンズ姿をみることもまずなかったと思います。フランス人が某チェーン店のハンバーガーを食べて喜んで、「フランス人の誇りを忘れたのか」とつつこんでおられたくらいです³。そんな深谷さんが 2013 年の 4 月からニューヨークの Stony Brook にある Simon Center for Geometry and Physics⁴に移られます。数学的には良い環境でますます活躍されると思いますが、果たしてちゃんと生活できるのかと心配がないわけではありません。幸い、ご家族も一緒に移られるそうなので食事の問題はなさそうです。最近ジーンズ姿を何度か目撃することがありました。奥様に勧められたとおっしゃっています。今の日本の生活リズムが、ニューヨークでの普通の生活リズムに相当するようで、向こうでは昼間普通に数学ができるでしょうから、結局、メールのやりとりはいままで通りかもしれません。ただ、極上の吟醸酒やどぶろくは手に入りにくいでしょう。場合によってはご自分で創り出されるかもしれません。否、これについては多分法律違反でしょう。

日本人の誇りを忘れず、今後もますますのご活躍を心よりお祈りいたします。
(2013 年 1 月 10 日。駄文多謝。)

[1] 太田啓史，数学通信 11 巻 4 号。(2006)。

[2] 小野薫，数学通信 15 巻 1 号。(2010)。

³ご自身はパリで某チェーン店に入られたことがあるらしい。

⁴Jim Simon により創始された研究所。